

読売新聞に見るピアニスト小倉末子 (1891~1944)

津 上 智 実

Pianist OGURA Suyeko (1891–1944) in the YOMIURI Newspaper

TSUGAMI Motomi

Abstract

OGURA Suyeko (1891–1944), a foremost Japanese pianist in the Taisho and the early Showa periods but now almost in oblivion, deserves more attention. She graduated in music from Kobe College in March 1910, before further study of a half year at Tokyo School of Music and approximately two years (1912–1914) at Musikhochschule Berlin. Her successful subsequent activities as a pianist and a teacher in the United States was followed by Tokyo School of Music's appointment of her as a piano lecturer in 1916 and a professor in the following year. Thereafter, she remained vigorous in performance and teaching for more than a quarter of a century. This paper is a first report of my attempt to make clear her activities as a musician by checking articles written on her in the YOMIURI Newspaper.

In the CD-ROM version of the YOMIURI, there are 68 hits for the name of OGURA Suyeko (or Suye) between 1911 and 1944. They include 21 articles containing her photos. She is referred to eleven times in 1916, the year of her return home to Japan after four years of absence, eight times in 1917, seven times in 1918, six times in 1919, with her energetic series of concerts, ten times in 1922, when her variegated activities were prominent, and five times in 1926, when her new expensive piano as well as her piano recital in the Teikoku Theatre attracted people's attention.

These references tell us that 1) Ogura got media attention in the very first year of her study at Tokyo School of Music, 2) she was in the spotlight in the Taisho period, 3) in the Showa period she kept active through the new media, radio broadcasting, 4) Tokyo School of Music and Ongaku Shoreikai were the main institutions for her activity, and 5) she gained both general esteem and partial criticism for her transcendent interpretation and aloof personality.

These facts are expected to provide a basis for a positive reappraisal of Ogura in the near future.

キーワード: 小倉末子、東京音楽学校、神戸女学院、音楽奨励会、読売新聞

Key words: OGURA Suyeko, Tokyo School of Music, Kobe College, Ongaku Shoreikai, YOMIURI Newspaper

本学音楽学部音楽学科教授

連絡先: 津上智実 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学音楽学部音楽学科
tsugami@mail.kobe-c.ac.jp

1) ピアニスト小倉末子 (1891~1944)

小倉末子¹ (1891~1944) は、1906年に開設された本学音楽部の初期卒業生の一人で、1910年3月に神戸女学院音楽部を卒業している。東京音楽学校 (現在の東京芸術大学) で半年 (1911年4~10月)、ドイツのベルリン王立音楽院で2年あまり (1912年4月~1914年7月) 学んだ後、アメリカで活躍して評判になり、1916年春、25歳で東京音楽学校ピアノ講師に迎えられた。翌年、同校教授となり、それから四半世紀以上にわたって演奏と教育の第一線で活躍した。

しかし、同時代の久野久 (1886~1925) がくりかえし語られてきたのとは対照的に、その功績は埋もれたままとなっている。演奏家ならびに教育者として、小倉末子は実際にどのような活躍をしたのだろうか? その実力と評価はどの程度だったのだろうか?

その実態を明らかにするためには地道な調査から始める他ない。そこでまず読売新聞 CD-ROM版を活用して、当時の紙面で小倉末子がどのように取り上げられているかを調べることから着手した。本稿はその調査報告である。

2) 研究の発端

そもそも私が「ピアニスト小倉末子」に出会ったのは、「初期神戸女学院」の授業準備を通してであった。神戸女学院『めぐみ』誌に掲載された過去の演奏会記録を遡って、再現できる最初の演奏会を探したところ、明治43 (1910) 年2月26日「有志者の催しにて午後7時より講堂に於いて」行なわれた「音楽演奏會」に行き着いた (『めぐみ』第50号9頁所収)。それ以前にも演奏会が実施された記録はあるが、具体的な曲名がほぼ分かるものはこれが最初である。

そこで2007年12月の授業時に、大学院音楽研究科1年生 (当時) の協力を得てミニ・コンサートを行なった。1910年の「音楽演奏會」からは「ポロネーズ ショパン作曲」「ミニユエットパデレフスキ作曲」と「イルマリタナ ワレス作曲」を演奏した²。

この内、パデレフスキー Ignacy Jan Paderewski (1860-1941) 作曲〈メヌエット Menuetto〉(1879) は今でも全音ピアノ・ピースに入っているポピュラーな曲である (なお、1910年の演奏者はシャルロット・デフォレスト先生で、本学にはデフォレスト先生のサイン入りの楽譜が残っている³)。一方、ウォレス Vincent Wallace (1812-1865) 作曲〈イル・マリターナ Il Maritana〉は今でこそ知られていないが、1845年にロンドンで初演されて大当たりした3幕のオペラで、ビゼーの〈カルメン〉(1875) に影響を与えた。その人気のほどは多様な編曲譜が19世紀末に至るまで出版されていることから窺える⁴。その序曲はオペラの中の聞かせ場 (愛のアリア、嵐の場面や合唱など) をメドレー形式にしたもので、色彩的で華やかなオーケストラ曲を鍵盤用に編曲したものは音域も広く、急速なパッセージや大きな跳躍も多くて、技巧的にも難度が高い。「音楽演奏會」を締め括るトリの曲にふさわしいが、当時こんな曲を弾きこなす学生がいたのだろうか? と疑問に思った。この曲の演奏者はオルガン「西田梅子」とピアノ「小倉末子」とあり、「小倉末子」はプログラムの前半でショパンの〈ポロネーズ〉も弾いてい

るので、当時の在校生の中では一番のピアノ弾きだったと目される。この「小倉末子」とは一体どんな学生だったのだろうかと思ったのがそもその発端である。

3) 従来の評価

先行研究としては、『西美濃わが街』第252号（平成10年5月号）特集「埋もれていた、音楽史の孤高なる星、天才ピアニスト小倉末（すえ）」に掲載された山田賢二「大垣が生んだ世界的な天才女流ピアニスト、小倉末子」（18～25頁）が唯一まとまったものである。この特集には弟子たちの寄稿、関係者インタビュー記事や年譜も含まれ、先駆的で誠実な取り組みの小伝である。私にとっても研究の出発点となったが、東京音楽学校の在学期間など誤りもあり⁵、演奏記録は6点のみで、全貌を掴むことはできない。

その他には、ピアニスト論の中で短く言及されたものがあるが、大半は久野久との対比で語られており⁶、小倉末子の活動そのものを知ることはできない。

4) 再評価の手順

埋もれてしまった過去の演奏家の再評価するにはどうすればいいのだろうか？

まず、1) 演奏の実績（いつ、どこで、誰の前で、何を弾いたか）を明らかにすること、さらに、2) 演奏に対する同時代の評価、3) 社会的な影響力、4) 教育者としての業績、5) 何をめざして演奏していたのかといった視点から、その活動と生き様を理解していくことが必要であろう。

小倉末子の場合、1945年3月10日の東京大空襲で赤坂の自宅を焼失したため、ご子孫のところにはほとんど何も残っていない。写真数葉と勲章のみで、楽器も楽譜もプログラムも、さらには書簡も日記もここには伝わっていない⁷。

このような場合、当時の新聞や雑誌の記事から掘り起こしていく他ない。しかし、小倉末子の演奏活動は1910年代から1940年代まで30年以上に渡っており、日刊紙の悉皆調査をするとなれば膨大な量になる。そこで、まず手掛かりとしてCD-ROM版が出されている読売新聞から始めることとした。

5) 読売新聞の記事

読売新聞 CD-ROM 版は「明治期：1874～1912年」「大正期：1912～1926年」「昭和戦前Ⅰ：1926～1936年」「昭和戦前Ⅱ：1937～1945年」と時代区分されており、「小倉末」で検索したところ4件、「小倉末子」で58件の計62件がヒットした。さらに検索語「小倉」でヒットした1481件中（明治期：397件、大正期：297件、昭和戦前Ⅰ：375件、昭和戦前Ⅱ：412件）、ピアニスト小倉末子に関するものが6件あった⁸。これら計68件の記事一覧を附録として後ろに掲げる⁹。年毎の掲載回数は表1の通りである。

【表1：年毎の掲載回数】

明治期（3回）：1911年（2回）、1912年（1回）
 大正期（52回）：1916年（11回）、1917年（8回）、1918年（7回）、1919年（6回）、
 1920年（1回）、1922年（10回）、1923年（2回）、1925年（2回）、1926年（5回）
 昭和期（13回）：1928年（2回）、1929年（2回）、1931年（2回）、1932年（1回）、
 1933年（2回）、1934年（1回）、1937年（1回）、1939年（1回）、1943年（1回）
 計68回（内、写真つき21回）

これを見ると、読売新聞での報道は小倉末子が上京した1911年から没年の1944年に及び、全68回中21回は写真付きである。特に、4年振りに帰朝した1916年（11回）、活発な演奏活動を繰り広げた1917年（8回）から1918年（7回）と1919年（6回）、多彩な活動の目立った1922年（10回）、高価なピアノと帝国劇場でのリサイタルで話題となった1926年（5回）に掲載回数が多い。小倉末子は学生時代から紙上を賑わし、大正期に脚光を集め、昭和に入ってから息長く活躍して注目され続けた存在だったと理解される。

6) 演奏家としての人気

演奏家の人気や注目度といったものは掴みどころがない。小倉末子の報道頻度（34年間に68回）はそれなりの人気を示すものだろうが、この数字にどれほどの重みがあるのか単独では測りがたい。そこで、同時代に活躍した音楽家たちと比較して相対化してみようと考えた。

その試みが「表2：演奏家名の出現頻度」である。当時は女性の名に「子」を加えることが多かった（幸田延が幸田延子など）、両表記のヒット数の合計を記している。旧姓ならびに改名（野辺地瓜丸は勝久に改名）も同様である。検索には同じく読売新聞CD-ROM版を用いた。

【表2】演奏家名の出現頻度

氏名	生没年	明治	大正	昭和戦前 I	同 II	計
幸田延（子）	1870-1946	44	18	7	4	73
安藤幸（子）	1878-1963	10	46	41	8	105
（柴田）三浦環	1884-1946	59	180	63	91	393
久野久（子）	1886-1925	2	64	3	2	71
山田耕作	1886-1965	1	274	212	125	612
パウル・ショルツ	1889-1944	2	38	3	5	48
小倉末（子）	1891-1944	3	52	10	3	68
長坂好子	1891-1970	0	22	13	3	38
柳兼子	1892-1984	0	67	19	6	92
高折宮次	1893-1964	0	8	16	3	27
萩野綾子	1898-1944	0	9	32	7	48
計		121	781	465	341	1708

表2において、圧倒的に多いのが山田耕作(612回)、次いで三浦環(393回)、安藤幸(子) (105回)、柳兼子 (92回)、幸田延 (73回)、久野久 (子) (71回)、そして小倉末 (子) (68回) と続

く。これを見ると、小倉末子の再評価がこれからという順番も素直に納得できる。

また、三浦環（1884年生）、久野久（1886年生）、山田耕作（1886年生）、小倉末子（1891年生）、長坂好子（1891年生）、柳兼子（1892年生）など明治20年前後生まれの音楽家たちが大正年間に華々しく活躍し、その波の中に小倉末子がいたことが如実に分かる。CD-ROM版ならではのキーワード検索の強みであろう。

7) 演奏活動の広がり

読売新聞の記事68点の記載内容から読み取ることができる小倉末子の演奏活動は、勤務先の東京音楽学校を始め、民間の音楽団体や慈善演奏会、ラジオ出演までの広がりを見せている。

まず、東京音楽学校での演奏は7回が報道されている（1911年10月21/22日、1916年5月28日、6月17日、11月16日、1918年4月27日、1922年5月中旬、1934年3月17日）¹⁰。

次に、民間音楽団体では音楽奨励会¹¹に7回出演しているのが注目される（1912年1月28日、1917年3月25日、1918年11月2日、1919年1月31日、3月29/30日、4月26日、1922年2月25日）。他に、慶応義塾大学ワグネル・ソサイエティ音楽会（1916年6月10日）、山野音楽会（1917年2月3日）、永徳倶楽部音楽会（1918年3月30日）、慶應義塾大学劇研究会主催演奏会（1920年10月2日）に出演している。

また、教育機関などの資金集めや困窮者救済など、各種慈善演奏会への出演がある。誠之小学校改築記念音楽会（1917年4月15日）、「公共白樺美術館設立」柳兼子独唱会（1918年2月17日）、朝鮮教化慈善音楽会（1918年4月27日）、[基本金増資]神戸女学院音楽会（1922年3月27日）、ロシア飢饉救済音楽会（1922年10月7日）、[関東大震災罹災者]義捐独奏会（1923年11月11日）、聖心聖マルグリット会（1926年10月16日）、東洋英和女学校新築基金募集演奏会（1928年4月21日）、都下女流教育家活動賛助演奏会（1931年1月29日）がこれに当たる。

さらに、外交や公的行事に協力した演奏として、三井男爵による英太子招待会（1922年4月21日）、日比谷公会堂ホール開き（1929年10月20日）への出演がある。

最も重要なのは、帝国劇場（1926年6月20日）で行なった自主公演のリサイタルであり、これは新たに買い入れた高価なピアノと相まって大きな話題となった。読売新聞でも1926年6月9日、17、20、21日と4日にわたって報道されている。なお、神田青年会館（1922年11月18日）における演奏については現段階では詳細不明で、今後の周辺調査が求められる。

ラジオ出演¹²としては7回（1929年1月28日、1932年1月1日、1933年4月15日、1933年11月11日、1934年3月17日、1937年3月15日、1939年5月24日）がある。加えて1938年1月2日にもラジオ出演していたことが、1939年5月24日の記事から知られる。

以上から、小倉末子が東京音楽学校と音楽奨励会を二本の柱としながら、慈善演奏会やラジオ放送に及んで演奏活動を展開していたことが明らかとなった。

8) 評価

これらの新聞記事の中には、演奏評や人物評も含まれている。それらの多くは肯定的なもので、当時の音楽界における小倉末子の突出した存在を窺わせる。例えば、「未だ本科一年生で

あるが音楽にかけては稀有の才能を有し、音楽学校開かれて以来未曾有の天才」(1911年10月19日)、「人格も高く意志の強い楽壇の天才」(1916年4月21日)、「この方の技量は当今の我国では飛びぬけているので、誰も肩をならべ得られないだろう」(1917年8月8日)、「中にも強く、長く誠に女性の弾奏とは思われぬまでに壮大な余韻を示しておられますのは、かの小倉末子女史でしょう。女史は備われるその気品と輝ける美の所有者たると同時に、御性格に於いてもまた日本の婦人には珍しいほどの機智性をより多く持っています」(1919年3月21日)と高く評価しているものが多い。

一方、批判的な評も散見される。例えば、山田耕作は「振るわなかった楽壇」という記事(1916年12月8日)の中で「音楽界でも小倉末子氏を矢鱈に、おだて上げ、充分に吟味もしないで、結局は追剥的行動をして忽ち赤裸々の人にする。天は直ぐに見捨てるのである」と吐き捨てるように述べている。小松玉巖も演奏会評(1917年3月31日)で「今少し音の色合いを要求したい。今氏が持っているものより、もっと暗い色と、もっと暖かい色と、そしてもっとソフトなタッチと明暗のグラデーションとがほしい」と書いている。

なお、1925年になると「小倉末子さんの秘蔵弟子」(1925年2月23日)、また和泉千代子が「第二の小倉末子女史であると評判をとっていた程著しく優れた楽才を噂されていた人」(1925年9月18日)と報じられて、新しい世代の出現が感じられる。

9) 再評価に向けて

以上の読売新聞掲載記事の調査から、1) 小倉末子は東京音楽学校に入学した年から早くも注目を集めて紙面でも話題になったこと、2) 大正時代に活発な演奏活動を行って大きな脚光を浴びたこと、3) 昭和に入っても、新しく始まったラジオ放送などを通じて息長く活躍したこと、4) 演奏の場としては東京音楽学校と並んで音楽奨励会が重要であったこと、5) 一般に高い評価と人気を得ていたが一部に批判もあったこと、が明らかになった。

今後の課題としては、1) 幼少期および神戸女学院時代に受けた音楽教育の実態を明らかにすること、2) ドイツ留学時代およびアメリカ時代の活動を解明すること、3) 大正期に果たした音楽的な役割を評価すること、4) 昭和戦前期における音楽家の社会的立場を理解すること、5) 小倉末子という人物が今に投げ掛ける光を考えること、が必要であろう。一歩ずつ解明の道を歩んでいきたい。

【附録：読売新聞に掲載された小倉末の関連記事(全68点)】〔下線は引用者による〕

1911(明治44)年10月17日朝刊5面

「学友会演奏会」

東京音楽学校学友会の演奏会は来る二十一、二日の両日開催の事は既報如くなるが当日の呼物は田中久子嬢のヴァイオリンと小倉末子嬢のピアノとの由なり 二嬢とも十八、九歳の少女なりと

1911年10月19日朝刊5面

「楽壇の二秀才、△学友会演奏会に出演」

東京音楽学校に於いては来る二十一、二十二両日、学友会演奏会を開催し、猶を当日の演奏中、特に田中久子、小倉末子二少女の演奏が専ら興味を以って迎えられ居る事は既報の通りなるが右に就き同校某教授

の談を聞くに

・二少女の妙技 二少女は未だ本科一年生であるが音楽にかけては稀有の才能を有し、音楽学校開かれて以来未曾有の天才であると言うことである。加えるに今回この二少女の演奏する曲目は田中嬢はロード作曲のコンチェルト、小倉嬢はショパン作曲のベルセーズ及びブラームス作のインテルメッツォで前の曲は従来音楽生として演奏したものなく後の曲は日本人のかつて演奏したことのない大曲である。田中久子嬢は小石川の高等女学校出身で音楽学校に入る七八年前からヴァイオリンを学び、耳の聴い事、指先きの早い事、優に天才とし賞賛さるべき技量を有し小倉末子嬢は神戸女子学院〔ママ〕の出身で令兄がドイツ人を夫人としている程であるから自然音楽も早くから親しんだ事であろう。

・最も詩的な曲 ショパンはポーランドに生まれ、フランスに於いて盛名を博した人である。その作七百八十、何れも詩的のもので、中にもこのベルセーズは最も詩的なものと言われている二つの内の一つで、外国の音楽家が手先の困難な作曲の程度を七段に分けているものの内六段五段の間に位する程の曲である。而してこの曲は優しい中にも一種寂しい感じのするもので先年ロイテル氏とベツオール夫人が有楽座で演奏した事があるのみである。

・哲学的な渋い曲 ブラームス作インテルメッツォはブラームスの曲では最も困難の曲で哲学的のもの、通常人には理解が出来ない。しぶいもので日本人には不向きのものである。因みに田中久子嬢は安東夫人につき小倉末子嬢はロイテル氏に就き益々天才の發揮すべき研究に努めているが何にせよ年齢十八か十九で斯かる大曲を演奏するかと思えば些か意を強くするに足る。』

1912 (明治45) 年1月30日朝刊5面

「音楽奨励会の演奏、△二十八日華族会館に於いて」

「前略」・小倉末子のピアノ独奏曲はベートーヴェンのソナタとショパンの子守歌と練習曲とでいつも子守歌が一番気が乗ってしまう。天使の様な赤子の夢はショパンの細い感じが流れた。〔後略〕

1916 (大正5) 年4月21日朝刊 【写真：本日帰朝する小倉末子女史、2段抜】

「小倉末子女史の帰朝、人格も高く意志の強い楽壇の天才」〔2段抜〕

女流ピアニストとしてその天才を欧米の楽壇に歌われた小倉末子女史は、いよいよ今二十一日横浜着の鎌倉丸にて帰朝のはずですが、女史の洋行について東京音楽学校教授牛山充氏は語られる「小倉さんが音楽学校へ入学されたのは確か千九百十一年頃と記憶します。女史は入学前にも神戸で音楽を勉強しておられましたので、その当時から抜群の技量があつて、予科の課程を踏まず直ちに飛び越して本科一年へ入学され、ルードルフ・ロイター先生の指導を受けましたが、先生も女史の優れた才分を非常に嘆賞して貴女はもはや日本で音楽を習うより洋行して私の師匠に就いて指導を受けるのがよろしい、と洋行を勧めました。女史もそれに同意して早速渡欧し、ベルリンの帝立高等音楽学校（カイザーの補助ある）でブラームスのバリエーションを演奏して直ちに入学の許可を得ました。入学後はピアノ部の長でロイター先生の師匠なるバルト教授の指導を受けていましたが、その間の女史の熱心な努力は非常なもので、その音楽的天才はたちまち火花の如く発しバルト教授も非常に女史の天分と熱心さに感心して親切に指導していました。そのうち女史は昨年の三月いよいよ卒業する事になっていましたが不幸にも欧州の大戦となり、やむなく英国を経て米国ニューヨークへ渡りました。その時ちょうどロイター氏がシカゴ市の音楽学校に教鞭を執っていましたが、ある日ニューヨークに来た時ふと新聞を見るとミス小倉の名が出ていたので懐かしくて、早速女史を訪れ、その後の事を語り合い女史は先生に就いてシカゴへ行って、ますます天分を磨くと同時に、懇望されたメトロポリタン・コンサバトリーの高給教授として教えていました。そして同地の来栖領事やロイター先生のすすめによって諸所の音楽会へ出ましたが、非常に名声を博しました。女史は人格も高く意志の強い雄々しいところがあると同時に、また反面には女らしい優しいところがあります。帰朝後は音楽学校に於いて親しく教鞭を執られる事になっていますがその暁には久野、神戸、橘らの三女史とともに我音楽界のために多大の貢献をせられる事と期待しています。なお女史は細川護立侯、亀井子爵、松平皇子傳育官らの組織している音楽奨励会の来月の演奏会に、バッハ、リスト、ベートーヴェン、ブラームス、ショパン等の難しい曲を演奏する事になっていますし、また音楽学校にても近く女史のために音楽会を催される事になっています」云々。

1916 (大正5) 年4月24日朝刊4面：よみうり婦人附録

「小倉女史の欧米楽壇所見：独逸は藝術家を尊び米は金づく」

既報の如く女流ピアニストの天才として歌われた小倉末子女史は令姉マリア夫人と共に乗船の鎌倉丸が

暴風のため予定より二日遅れて、二十三日早朝横浜着、女史はボンネット

△紫紺羽二重の上衣にスカートの清楚なる洋装に小柄の身を包み、黒眼勝の眼に微笑を湛えて語る「私が日本を出発したのは四年前の三月末で、シベリアを経てベルリンに至り、王立音楽学校へ入学して、種々勉強していましたが、丁度卒業間際の一昨年、国交断絶しましたので八月十五日夜オランダのペールに向け九時間の所を三昼夜も掛けて而かも汽車に立詰め参りました。出発に際しバルト教授は経済其他の不足があれば

△援助すると云われましたが、目前に露西亜の夫人や子供がピストルや其他の凶器で迫害され狂気の如く逃げまどうのを見たり、大使夫人に退去を勧められたりもしたので思い切ってヘールから倫敦に行き更にニューヨークからシカゴ等へ渡り旧師のロイテル先生のお世話を受けました。米国の楽壇はドイツに比すると格段の遜色があります。これはドイツは芸術家を尊重すること厚いが、米国では芸術も金銭で購い得ると云う考えであるのに帰すと思います。しかし中々

△音楽は盛んで私もドイツでは一切学生として学びましたが、米国では演奏会その他実際上の刺激を受けました」云々。なお女史の洋行中に於ける音楽上の名声や、帰朝後東京音楽学校に教鞭を取られる事等は既報の通りです。(横浜電話)

1916 (大正5) 年4月24日朝刊5面

「大暴風雨に遭いし鎌倉丸 ▽名士多数を乗せ ▽二十三日横浜入港」

「前略」船客七十六名にして中にはピアニスト小倉末子嬢 (談話婦人欄所載) を始め 「後略」

1916 (大正5) 年6月1日朝刊6面

「音楽大演奏会」

音楽学校の大演奏会は二十八日午後二時から校内の楽堂で催された。ここで無くては見られぬ修養ある聴衆が堂に満ちていた。[中略] 小倉末子女史のピアノは大分期待して行ったが、やはり甘(うま)い。日本人には珍しく細かい音がハッキリしてそこから起って来る明るい華やかな階調が特に鮮やかに感じられた。[後略]

1916 (大正5) 年6月7日朝刊4面：よみうり婦人附録：婦人界消息

「小倉末子」：東京音楽学校講師を嘱託され予科及び一年の一部担当

1916 (大正5) 年6月7日朝刊7面：よみうり抄

「小倉末子氏」は10日の慶応ワグネル、ソサイエティ音楽会に於てショパン、リスト、ドビュッシーの数を演奏する由

1916 (大正5) 年6月14日朝刊4面：よみうり婦人附録

「小倉末子嬢独奏会」は来る17日(土曜日)午後7時上野公園東京音楽学校奏楽堂に於いて開会されます。

1916 (大正5) 年9月20日朝刊4面：よみうり婦人附録：今日の婦人(二十三)

「黒眼勝ちの大きな瞳 楽壇の末子女史」【写真つき】[本文割愛]

1916 (大正5) 年11月16日朝刊4面：よみうり婦人附録

「御前演奏の闊秀音楽家 ▽七女史の光栄」[本文割愛]

1916 (大正5) 年11月17日朝刊4面：よみうり婦人附録【写真：御前演奏の両女史(向かって左小倉末子、右田中久子) 2段抜】「御前演奏、音楽学校へ行啓」[本文割愛]

1916 (大正5) 年12月8日朝刊7面：

「振るわなかった楽壇」 山田耕作

思い出すままに、本年の音楽界に於ける音楽会の数だけを挙げてみると、東儀哲三郎氏等のオーケストラ、スインフォニア、小倉末子氏の帰朝早々の演奏、皇后陛下の行啓に際して音楽学校で若手の人々がそれぞれ御前演奏をしたこと、近代楽友会と女子大学校友会とが主催になってやる筈の久野久子氏全快祝の演奏会、音楽奨励会の作品独奏会(今年最初の)毎月の音楽普及会、[中略] それと私のピアノ小品発表

音楽会、これ位のものであったろう。私は前記のどの音楽会も聴かなかった。その数から言っても、私の耳に響いてきたものから言っても振るわなかった。要するに日本の音楽界は音楽学校が振るわなければ振るえなかったということになる。[中略]

画界などばかりではなく、音楽界でも小倉末子氏を矢鱈に、おだて上げ、充分に吟味もしないで、結局は追剥的行動をして忽ち赤裸々の人にする。天は直ぐに見捨てるのである。来朝したスマイルノーワ嬢などに対しても、音楽界の人がもっと熱心であって然るべきである。[後略]

1917（大正6）年1月25日朝刊4面：よみうり婦人附録：婦人界消息

「小倉末子女史出演」2月3日午後7時より帝国ホテルにて開催の山野音楽会にはザルコリ氏始め小倉末子女史等出演する由

1917（大正6）年3月24日朝刊4面：よみうり婦人附録

「小倉女史の独奏会」

明二十五日午後七時から、本郷区追分第一高等学校前の青年会館で、音楽奨励会主催の小倉末子女史独奏会が久方振りで開催されます。曲目は小倉女史が最も得意とされる、ポーランドの音楽詩人ショパンの傑作中、一番親しみのある曲を十と、フランス近代作家中の二明星たる、サン・サーンスとドビュッシーとを選ばれたのですから、定めし感銘の深い事でありましょう。因みに音楽奨励会の演奏会は従前は会員のみ聴く事に限られていましたが、今回からは会員でなくとも特志の方は聴かれるそうです。

1917（大正6）年3月31日朝刊7面

「ポーランドとフランスのゆうべ」 小松玉巖

昨夜は音楽奨励会の青山君の御好意で小倉末子君の独奏会を聴きに参りました。[中略]

これで楽しいピアノのゆうべを終わったのでありますが、小倉氏がどしどし研究をつづけて独奏会を開かれるのは感服の外はありません。私は久しぶりでしみじみ嬉しい音楽を耳にしました。この会に君の見えなかったことを大変残念に思っております。最後に少しばかり欲を云わして頂きましょう。私は小倉氏のあの技術の上に今少し音の色合いを要求したいと思います。今氏が持っているものより、もっと暗い色と、もっと暖かい色と、そしてもっとソフトなタッチと明暗のグラデーションとがほしいと思います。ショパンやドビュッシーの音楽には特にこの感が深う御座います。（三月二十六日）

1917（大正6）年4月5日朝刊4面：よみうり婦人附録

「一晚歌えば三万円、日本の洋楽趣味はまだまだ幼稚、現今一流の欧米諸国のプリマドンナ」

楽しそうな小鳥と共に、金鈴の声を振う春の音楽会も大分色めいて参りました。つい先頃の小倉末子女史の独奏会に次いで五月には久野久子女史及び柳かね子夫人等の独奏会が催されるとの事 [後略]

1917（大正6）年4月6日朝刊4面：よみうり婦人附録：消息

「小倉末子女史」：昨5日東京音楽学校教授（勲7等）に任命されました。

1917（大正6）年4月15日朝刊4面：よみうり婦人附録：消息

「誠之小学校改築記念音楽会」15日午後1時より東京音楽学校にて開催。樋口信平氏の低音独唱、小倉末子女史のピアノ、その他常磐津、長唄、三曲合奏などがあるとの事。

1917（大正6）年4月16日朝刊4面：よみうり婦人附録

「誠之小学校音楽会」昨日午後一時半から、東京音楽学校のホールで、誠之小学校改築記念音楽会が開かれました。樋口信平氏の声量豊かな「コルメルの帰国」と、小倉末子女史の「ノクターン」と「スケルツォ」とは、微雨降り注ぐこの日に、ふさわしい調べで聴衆の喝采を拍しました。

1917（大正6）年8月8日朝刊4面：よみうり婦人附録【写真：待たるる今秋楽壇のスター 花島秀子、永坂よし子、小倉末子、蜂谷龍子】

「涼みの噂さ楽壇の女神、この秋に咲きにおう、花の才媛はたれたれ」

[前略] 次にピアノの名手

・小倉末子 この方（二八）の技量は当今の我国では飛びぬけているので、誰も肩をならべ得られないだ

ろうとのことです。今までは手先の器用な小さなところが日本人にうけていましたが、一昨年の帰朝来その幣を全く打破された傾向があります。そして小倉さんの左手は実によく利くので、右手よりも却って強い位だそうです。そしてバツハバリエーションあたりから始めて、ブラームス、ショパンより現代のドビュッシー等の曲まで、各々違った感じで弾き得られる方は、我国では小倉さんの外にないとまで云われておられます。[後略]

1918 (大正7) 年1月28日朝刊4面：よみうり婦人附録：消息

「柳兼子夫人独唱会」来る2月17日午後7時より本郷追分帝国大学基督教青年会館にて、公共白樺美術館設立のため、柳兼子夫人の独唱会が催され、同夫人の外に小倉末子嬢及び弘田百合子夫人も出演されます。[後略]

1918 (大正7) 年3月3日朝刊4面：よみうり婦人附録【写真つき】

「楽聖グノー百年記念音楽会」楽聖グノー百年祭記念大演奏会が、昨2日午後2時から上野東京音楽学校奏楽堂に催されました。丁度土曜日でしたので、男女学生の入場者が非常に多く、爪もたたぬほどの大盛況で御座いました(写真向かって右より小倉末子嬢、ルーマノフ夫人、横枕楽長、長坂よし子、武岡つる子)。

1918 (大正7) 年3月25日朝刊4面：よみうり婦人附録

「一年ステージを断念する久野女史、天来の神韻に触るる迄、燃立てる心の中」

過ぎし二月から三月にかけて、いくつもの大音楽会が方々に催され賑やかな音楽のシーズンを見ました。そしてその会の度ごとに小倉末子、柳兼子など歴々の方の出演を見ましたが、ただ一人久野久子女史だけは、何故か一度もお顔をお見せになりませんでした。[後略]

1918 (大正7) 年3月27日朝刊5面

「永徳倶楽部音楽会」永徳倶楽部には第1回音楽会を来る30日午後7時30分麹町区永楽町日清生命保険会社楼上に開きザレスカ夫人小倉末子嬢のピアノ、窪兼雅氏のヴァイオリンその他管弦楽独唱四重唱等ありと

1918 (大正7) 年4月24日朝刊4面：よみうり婦人附録：消息

「朝鮮教化慈善音楽会」来る27日正午帝国劇場に於て朝鮮教化の爲め慈善大音楽会が開催されます。当日は小倉末子嬢、柳夫人等の出演があります。

1918 (大正7) 年4月27日朝刊4面：よみうり婦人附録【写真：朝鮮国で犬コ口と戯れて居る小倉末子女史と令姉】

「君が代を歌った小さい朝鮮人に同情して、今日帝劇で開催される、朝鮮教化事業慈善音楽会に演奏の小倉末子女史の談」

私は幼いときから基督教の教育を受けていましたから、新同胞であります朝鮮人に伝道する事業の拡張費募集のためには心から賛成しています。殊に一昨年の十二月私は京城に姐さんと一所に参りまして慈善音楽会を開きました。そのときのこと、一夜、李王家から招かれまして王妃の御前で演奏する光栄に浴しました。そのときの光栄は今でも深く感銘しております。また京城の各学校を参観しましたとき、可愛い児童が日本語で「君が代」を歌うのを聴きまして涙ぐまれるような気が致しました。私は僅か一週間しか朝鮮には滞在していませんでしたが、新同胞に対して深い愛を感じました。そして一時失望の底に沈んで暗い気持ちでいました新同胞が、基督教によって漸次光明に導かれて行く姿も見ました。私は愛する新同胞の幸福を祈っておりますときに朝鮮教化の寄付金が募集されることを知りました。女の力ではありますがつくされるだけのことをしたと思いました。

1918 (大正7) 年10月29日朝刊4面：よみうり婦人附録

「小倉末子嬢独奏会」十一月二日午後七時より本郷追分帝大学生基督教青年会館で洋琴音楽発達研究第一回演奏会に小倉末子嬢が出席独奏される由

1919 (大正8) 年1月30日朝刊4面：よみうり婦人附録

「音楽奨励演奏会」1月31日午後7時から本郷区追分東京帝国大学基督教青年会館に於第34回音楽奨励会演奏会が開かれ、小倉末子女史独奏数番があります。[後略]

1919（大正8）年2月2日朝刊4面：よみうり婦人附録

「小倉女史独奏会」三十一日、追分青年会館で開かれた小倉末子氏の独奏を聞く。カール・マリア・フォン・ウェーバーの舞踏会の招待、フランツ・ペーター・シューベルトの幻想曲、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディの正変奏曲、ロバート・シューマンの交響乐的練習曲等、どれも非常に良かった。演奏を重ねる度に、益々入神の域に達して行かれる事を我楽壇のために喜ぶ。

1919（大正8）年3月21日朝刊4面：よみうり婦人附録：職業婦人【写真：小倉末子女史】

「音楽に依って、人の世に伝道、小倉末子女史」

現今東都の閨秀楽壇はさながら花壇に百花咲き乱れて、おのおの其の妍を競えるかのように、また各自の技術に楽想に緩まぬ研究と特色とを發揮して聴衆の頭脳を開発させていますが、中にも強く、長く誠に女性の弾奏とは思われぬまでに壮大な余韻を示しておられますのは、かの小倉末子女史でしょう。女史は備われるその気品と輝ける美の所有者たると同時に、御性格に於いてもまた日本の婦人には珍しいほどの機智性をより多く持っています。女史は徐に「私は神戸の生まれで丁度義姉がドイツ婦人でありましたのでもう三歳の折からピアノの音を聴くと幼心にも何とも言えぬ嬉しさを覚えましたことなどが、今でもおぼろげに記憶いたしています。それで学校の方も神戸女学校〔ママ〕の普通科からピアノ科を専修し後東京音楽学校に転じて、間もなく外国へ参りました。そして主にフランスのミュージカル・アカデミーで遊びましたが、その四っ年ばかりの間は、思い出しても懐かしい事がたくさんございました。私は以前から基督教に信仰をもっていますので、こうして趣味から音楽家の端に連なっていますが、この尊い清いそして言い難い神の御教えを音楽というものに依って人の世に伝えたいのが私の念願なのでございますけれどもまだまだそうした私の心の儘に響きを伝えてはくれませんのです」と厚い信仰と際限なき芸術の偉大な力に飽くまで没頭したいとのようなすべてに献身的な強い強い印象を記者に残されました。

1919（大正8）年3月24日朝刊5面

「春を目醒る楽壇の百花繚乱、最近来朝の露国女流音楽家、「白樺」の十年記念栄会の期待」

〔前略〕二十九、三十の両日には音楽普及会¹³の主催で午後二時から本郷追分帝大青年会館で永らく待ち焦がれていた小倉末子女史の独奏会が開かれる。音楽普及会の最後の演奏会と聞くから盛大なことであろう。[後略]

1919（大正8）年4月25日朝刊4面：よみうり婦人附録

「洋琴発達研究演奏会」二十六日午後二時より本郷追分帝大青年会館にて小倉末子嬢の独奏ある由

1919（大正8）年12月7日朝刊7面【写真：本年の楽壇に最も活躍する小倉末子嬢】

「一九一九年に於ける我国楽界の回顧」 兼常清佐

〔前略〕昨年以来の音楽奨励会の歴史的演奏を完成した小倉氏の名もまた決して逸しなんでしょう。これはおそらく現代の日本婦人の手で演奏された曲目に一新記録であろうと思っています。[後略]

1920（大正9）年10月2日朝刊4面：よみうり婦人附録【写真：ピアノ二重奏…今日慶應大学講堂で（萩原英一氏と小倉末子女史）3段抜】

「慶應の演奏会」〔前略〕小倉末子嬢と萩原英一氏のピアノ二重奏は音楽学校以外では初めてのものです。[後略]

1922（大正11）年2月25日朝刊4面：よみうり婦人附録

「小倉末子独奏会」二十五日夜七時から東京駅前工業倶楽部にてベートーヴェン作品ピアノ独奏会を催すことに確定した。

1922（大正11）年3月16日朝刊4面：よみうり婦人附録

「神戸女学院音楽会」神戸女学院出身の東京在住の人々により母校の基金の一部にもとて来る27日夜青年会館に音楽会が開催され同学院出身のピアニスト小倉末子女史及び長坂好子女史等出演すると

1922 (大正11) 年4月19日朝刊4面：よみうり婦人附録

「萩原小倉二教授の初めての二重奏、五月東京音楽学校で」

五月中旬東京音楽学校に開かれる春季大演奏会には同校教授萩原英一氏と小倉末子女史が管弦楽伴奏でモーツァルトの二重協奏曲を演ずる筈で目下練習中であるが両氏の合奏は今回が初めてである。

1922 (大正11) 年4月22日朝刊5面

「英太子は昨夕、御帰京、夜は三井男の招待会に台臨」

「前略」三井男自慢の能舞台で梅若兄弟の紅葉狩が演ぜられ、終って小倉末子のピアノ独弾があり、殿下には御拍手を給うて十一時還啓した。

1922 (大正11) 年8月28日朝刊4面：よみうり婦人附録

「久野久子さんが五年振りの出演、九月初旬に帰京して独奏会の準備に掛かる」

「前略」現在音楽家の花形として許されるものは小倉末子久野久子の二女史であろうが久野女史だけは長大正七年の独奏会以来専ら研究練習に没頭して一昨年日曜学校大会の晴れの舞台にさえ長尾半平氏から禮を厚うして迎えられたのを固辞して結局小倉末子女史が代演することになった位であったが、今秋のシーズンには五年振りステージ姿を見せることになった。〔後略〕

1922 (大正11) 年8月31日朝刊7面【写真：小倉末子嬢】

「音楽界の新人旧人」 WAO

小倉末子はたしかに巧みである。はじめドイツやアメリカで成功したという宣伝が聞いたとき（これを宣伝でないという人があれば、それでもいい。）例の日本人だからというハンデキャップのいった外人の好奇心にての成功かと考えられた。しかし帰朝後第一の演奏会は必ずしもそうでないという印象を与えられない。そうして久野氏といずれという噂はいよいよ高まっていった。

そういう噂はどうでもいとして、小倉氏はたしかに成功した。そうして氏の演奏会が続々と催された。その中で特に氏を印象せしめたのはいつかの音楽奨励会でピアノ楽の歴史的演奏会をしたことである。そうして氏がバッハ、ベートーヴェン、ショパンはもとより、ブラームスにまで及んで、そのいずれにも相応な腕を示したのは、当時において珍しいことであった。あの一連の演奏会は十分に意義のあるものだと思う。ただこれらの各楽人に対する氏の理解の程度がどれほどであったかは今日によりて考えると疑問とせざるを得ない。

氏の技巧は比較的確である。しかしその表現は弱い。もしも久野氏がピアニシモをピアー〔ママ〕又は甚だしいときにはモデラート位で奏する傾があるとすれば、小倉氏はあべこべとっていい。ある人が小倉氏の弾き方を算盤はじきのようだと言った。楽の内容に立ち入らない評にはちがいないが、しかしある暗示のある評である。

両氏とも全盛時代はすでに過ぎた。氏たちの時代のすぐあとで、欧州の名人たちが来て、日本の聴衆の耳をすっかり馴らしていった。今日になって両氏が進もうとするには、いずれもそれぞれ、新しい道を開拓しなければならないであろう。内容のない大物をかかげて素人をおどす時はもう去った、願わくはあたらしい聴衆に新しい感銘を与えるような音楽が聞きたいものである。小倉氏も久野氏も随分長いこと沈黙した。もう一度現れてもいいであろう。尤も一つのを仕上げるのに一月も練習しなければならないとすれば、すぐに種切れになる恐れがあるであろうがいやしくも高名な両氏にそんなことのある筈がないから、充分安心している。

1922 (大正11) 年9月29日朝刊4面：よみうり婦人附録

「飢民救済の音楽会 ◇十月七日青年会館で」

「前略」音楽会には特に実業家成瀬正行氏が秘蔵のピアノを貸し小倉末子女史がそれを演奏するという事である。

1922 (大正11) 年11月17日朝刊7面：楽界消息

「小倉末子女史」18日夜神田青年会館でリストブラームスの作品を演奏する

1922 (大正11) 年12月6日朝刊4面：よみうり婦人附録

「音楽会、明春の皮切は小倉末子久野久子両氏、柳兼子夫人は二月お産」〔本文割愛〕

1922 (大正11) 年12月26日朝刊5面

「二月の独奏会が終って久野久子さん修業の外遊、殊にドイツではみっちり研究、今日此頃は夜の目も寝ねず、温泉場へもピアノを運んで」

[前略] それを前後して催される小倉末子さんの独奏会と共に多くの期待と興味をもって待たれている。
[後略]

1923 (大正12) 年11月3日朝刊6面：楽界消息

「小倉末子女史 (洋琴家)」11日大阪公会堂にて義捐独奏会を催す

1923 (大正12) 年11月30日朝刊7面：よみうり抄

「小倉末子女史」過般関西の独奏会で得た1600円をこのほど罹災者救済金に義捐した由

1925 (大正14) 年2月23日朝刊7面

「梅小路子爵の令嬢が結婚して家庭の人に、小倉末子さんの秘蔵弟子で、ピアノの才を胸に抱いて」
旧公卿子爵梅小路定行氏の令嬢加壽子さん(二五)さんは数年前山脇高等女学校を卒業し小倉末子さんについてピアノを専心に習い今では小倉さんの秘蔵弟子として立派な腕を持っていますが [中略] 十年も小倉さんについて、専門家にまでなろうと思った加壽子さんが、その望みを捨てて、家庭の人となるのでさぞ美しい趣味の家庭が営まれることでしょう。

1925 (大正14) 年9月18日朝刊7面

「四年振りで帰朝した和泉千代子嬢、第二の小倉末子さんと楽才をうたわれる人」

東京音楽学校を卒業して直に欧州に赴き音楽研究を続けていたピアニストの和泉千代子嬢は去十六日夜東京駅に学友の高階ます子夫人や厳父のセールフレザービクター蓄音機部の和泉部長等に出迎えられ帰朝した。千代子さんはおもにベルリンに滞在して専心ピアノの研究を続け在独の邦人音楽家間には第二の小倉末子女史であると評判をとっていた程著しく優れた楽才を囃されていた人だけに人材の少ない我が洋楽界で今後大いに活躍することであろうと期待される。

1926 (大正15) 年6月9日朝刊7面【写真：3段抜】

小倉末子さんのピアノ独奏会 二十日帝劇で 楽壇の喜び

震災以来ステージに一度も出なかった女流大洋琴家小倉末子女史が来る二十日午後一時から帝劇でピアノ独奏会を開くことになった。女史は現に東京音楽学校教授で、震災前は盛んにステージに出て好楽家を喜ばせピアノ曲の歴史的演奏まで企てられたものだが、その後は沈黙を守って家にあって門下の教授に専心していたところ今度門下生たちの勧めで独奏会をすることになったのだ。年と共に益々その美を増す女史の楚々たる姿から弾き出される音は必ず聴衆を喜ばせるだろう。なおレーヴェ夫人が賛助出演するそうである。(写真は小倉末子女史)

1926 (大正15) 年6月17日朝刊5面：オンガク

「小倉末子氏独奏」来る二十日午後一時から帝劇で洋琴家小倉末子女史が久しぶりに独奏会を開く。レーヴェ夫人が賛助出演するそうだ。小倉女史はバッハ、ショパン、ブラームス、スガムバチ、リスト、ドビュッシーの作品を演奏する。

1926 (大正15) 年6月20日朝刊5面：今日の催し

「小倉末子女史演奏会」帝劇

1926 (大正15) 年6月21日朝刊2面【写真：右ネトケ女史左小倉女史】

「一萬圓のピアノ独奏会」

楽壇からしばし遠ざかって専心研究に没頭して居た小倉末子女史は今度新輸入した米国メソエンドハモクレングラントピアノ其価一萬圓もする世界一の高級ピアノ独奏会を東京音楽学校声楽部教授ネトケ夫人援助の下に二十日午後一時から帝国劇場で行った。

1926 (大正15) 年10月13日朝刊5面：オンガク

「安藤小倉両女史とス氏の室内楽大演奏会」

上野音楽学校の教授安藤幸子夫人（提琴家）は同じく洋琴家小倉末子女史及び来朝中のチェロの巨匠セルゲイ・ストウピン氏と共に慈善事業を営んでいる聖心聖マルグリット会のために来る十六日午後三時から日本青年会館に室内楽の演奏をすることになったが夫人は室内楽に多大の趣味を持つところからストウピン氏との三重奏の他に小倉末子女史と二重奏をすることになりその曲目をグリーグのソナタと定めこれをもって演奏会皮切の曲目とし、なお間に三氏の独奏をも入れて最後にトリオをもって終るプログラムを編成した。幸田延子女史はこの企てに非常な賛成をして三氏のために自邸を練習所に開放して何くれとなく面倒を見ているが、安藤夫人が小倉女史と二重奏を演奏するのも楽界始って以来のことなのでこの演奏会は何れにせよ楽壇に大なる波紋を広げることと識者は非常に注目している。

1928 (昭和3) 年4月12日朝刊3面

「名人揃いの演奏会」[本文割愛]

1928 (昭和3) 年4月21日朝刊7面

「小倉女史等のピアノトリオ」

ピアニストの小倉末子女史はヴァイオリンの安藤幸子夫人、チェロのウエリクマイステル氏とピアノトリオを組織して本日午後二時から日本青年会館で催される東洋英和女学校の新築基金募集の演奏会でチャイコフスキー作のトリオを演奏する。

1929 (昭和4) 年1月28日朝刊3面【写真：「ピアノ独奏の小倉末子さん」】

「午後九時 AK より全国へ、ピアノとオーケストラ、華豪に響く協奏曲、ピアノ独奏、小倉末子、JOAK シンフォニーオーケストラ、指揮 ヨセフケーニヒ」モーツァルト作曲、ピアノ協奏曲ニ長調「戴冠式」

1929 (昭和4) 年10月21日朝刊7面【写真：「新公会堂のホール開き音楽会、壇上は長坂女史、ゆうべうつす」4段抜】

「日比谷公会堂ホール開き、上野音楽学校教授連で、華々しく興行」

「前略」この他出演者は音楽学校の安藤幸子、小倉末子、高階宮次、レオンド・コハンスキーの四教授であったが花輪と拍手の洪水にホールの前途を祝福して華々しき裡に閉幕した。

1931 (昭和6) 年1月27日朝刊8面【写真】

「小倉女史の応援演奏」

都下女流教育家扱は名流夫人により旧令来白米錬磨が行われているが、我が洋琴の名手小倉末子女史もこれに応援すべくその基金を得るため二十九日午後三時から帝劇に得意の名曲を掲げて三年ぶりに洋曲大演奏会を開催する。

1931 (昭和6) 年2月12日朝刊4面：学芸界【写真】

「オン・パレード、楽壇の未婚女性」

「前略」雨が降ると学校に姿を見せないのがこれも音楽学校のピアノ科の小倉末子女史だ。髪のかき方が平常と違って、旧式の二百三高地になった日は生徒が腫れ物に触るように恐がる熱情家だ。その明眸は楽壇のピカードと言われる麗人だがこれもピアノと結婚している一人だ。(写真は小倉末子氏) [後略]

1932 (昭和7) 年1月1日朝刊11面：ラジオ【写真：2段抜】

「麗人ピアニスト小倉末子さんの独奏、古典から現代曲まで」

楽壇の不壊の白珠と云われる麗人ピアニスト小倉末子さんが久しぶりにAKより放送する。曲目は古典バッハ、ロマンティックなショパン、サンサーンスから近代のアルベニスまでの次の5曲である。[曲目省略]

1933 (昭和8) 年4月15日朝刊10面

「ピアノ独奏、午後八時、小倉末子」グルック〈旋律〉(スガンバーディ編曲)、シューベルト〈大幻想曲〉ハ長調 [解説省略]

1933 (昭和8) 年11月11日朝刊10面【写真：2段抜】

「ただならぬ御方を、悼みまつる葬送行進曲、ヴァーグナーの名曲に心籠むる、小倉末さん」

明日の故朝香宮妃殿下の御喪儀を前にして今晚、最終の演芸の時間に亡き妃殿下を悼み奉るに相応しき曲を選び、東京音楽学校の小倉末教授がピアノを独奏する。「橋さん(糸重教授)は姫宮様方をお教え申し上げておりましたが私は御殿に上がった事もなく妃殿下の御前で演奏致しました事もございます」漆黒のグランドピアノ二台が置かれている和室スタジオから、譜面を持ってきて繰り広げながら小倉さんは静かに語りだす。[後略] (写真は小倉末さん)

1934 (昭和9) 年3月17日朝刊10面【写真：奉祝演奏の出演者】

「邦楽洋楽の第一人者が、熱誠を籠めて奉祝、上野の東京音楽学校から中継、両陛下御成婚十周年 皇太子殿下御誕生 奉祝演奏会」[本文割愛]、モーツァルト作曲、ピアノ協奏曲 K. 537番 第一楽章、ピアノ：小倉末、クラウス・プリングスハイム指揮、東京音楽学校管弦楽部

1937 (昭和12) 年3月15日朝刊10面：ラジオ

「奏鳴曲イ長調、フランク作曲、ヴァイオリン、アウグスト・ユンケル、ピアノ、小倉末子、午後八時二十分、室内楽」[曲目解説つき]

1939 (昭14) 年5月24日朝刊6面【写真：1.5段抜】

「ピアノ独奏、小倉末子さん1年半ぶりに放送、午後八時より、第一スタジオ」[写真つき]

上野の東京音楽学校ピアノ科教授小倉末子さんは昨年1月2日のお弾初めにブラームス作の「変奏曲」ニ長調作品21を放送したが、今夜約1年半振りにピアノ独奏をする。バッハノリストくプレリュードとフーガ、シューマンく蝶々 Op. 2、ロージェーデユカスく舟唄 [曲目解説つき]

1943 (昭和18) 年9月28日朝刊2面：訃報【写真】

「小倉末女史」(従三位勲三等、東京音楽学校教授、洋琴家) 25日午前死去。享年54。告別式はキリスト教により29日午後2時から赤坂区氷川町5の自宅で営む

注

- 1 戸籍上は「小倉末」であるが、演奏会プログラム等では「小倉末子」と表記していることが多い。
- 2 「スクエア・ピアノの演奏～大学院音楽研究科生による～」(2007年12月12日(水) 17:20～18:10、於：神戸女学院大学図書館本館ロビー、使用楽器は1860年製のスタンウェイ社スクエア・ピアノ)。曲目と演奏者：1) Fryderyk Chopin (1810-1849) : <Polonaise> g-moll, Op. 11a-1 (1817) : 河野佑美 (ピアノ=pf)、2) Ignacy Jan Paderewski (1860-1941) : <Menuetto> Op. 14-1 (1879) : 多田安希子 (pf)、3) Vincent Wallace (1812-1865) : <Maritana> (1845) 序曲 (ピアノ独奏用編曲版) : 城沙織 (pf)、4) Giovanni Battista Pergolesi (1710-1736) : 《Stabat Mater》 (1736) No. 9 <Sancta Mater, istud agas>, No. 12 <Quando corpus morietur> : 周防彩子(ソプラノ)、谷田奈央(メゾ・ソプラノ)、三村祥子(pf)。なお、ショパンのくポロネーズは曲番が1910年のプログラムに記されておらず、曲の同定ができないため、演奏者の選択に任せた。ウォレスのくイル・マリターナも1910年に演奏されたのはオルガンとピアノの2台用編曲であるが、この編成の楽譜は入手できなかったため、ピアノ独奏用編曲版で演奏した。
- 3 シャルロット・B・デフォレスト先生は後の神戸女学院第5代院長(在任1915～1940年)であるが、当時は音楽科担当であった。この楽譜の存在をご教示下さった田中恵美子氏に感謝申し上げる。
- 4 ピアノ編曲版はもとより、鼓笛隊、ハーブ、ヴァイオリン用など種々の編曲版が相次いで出版された。2007年12月の使用楽譜は：Maritana of W. V. Wallace (Collection Litolf, Ouvertures pour piano seul; 134, s. d.)
- 5 1909年卒業とされているが、1909年に卒業したのは「福島県平民、声楽科」の「小倉すゑ」であり、本稿で扱っている「岐阜県士族、ピアノ科」の小倉末とは同姓同名の別人である。小倉末は上述のように東京音楽学校には半年しか在籍しておらず、1911年春の入学者名簿には記載があるが、卒業生名

簿には記載がない。

- 6 萩谷由喜子『田中希代子―夜明けのピアニスト』（ショパン社、2004年）150～155頁。
- 7 ご子孫の小倉君江さんの談による。小倉君江さんのご協力に、また小倉君江さんをご紹介下さった山田賢二さんに御礼申し上げる。
- 8 検索には国立国会図書館を利用した。
- 9 記事内容の入力には中村公美氏の協力を得た。記して感謝する。
- 10 東京音楽学校での演奏については東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』（音楽之友社、1987-2003）に詳細な記録がある。
- 11 音楽奨励会に関する基本的情報は藤本寛子「洋楽受容期における民間音楽団体の演奏会活動」（北海道教育大学大学院2002年度修士論文）から得た。この論文についてご教示下さった武石みどり氏に感謝申し上げます。
- 12 日本でラジオ放送が本格的に始まったのは1925年。
- 13 「音楽普及会」とあるのは誤報で、正しくは「音楽奨励会」。次行の「音楽普及会」も同じ。

本論は神戸女学院大学研究所2008年度研究助成（研究課題名「音楽教育の黎明期とピアニスト小倉末」）によって支えられている。ここに記して謝意を表す。

（原稿受理 2008年10月6日）